

月例研究会（2021年1月27日）

## 1930年代の日本のプロレタリア革命芸術運動における偉大な女性たち

金 怡 辰

プロレタリア芸術運動は、芸術家組織を結成し、機関誌を刊行することでプロレタリア芸術、政治的イデオロギー、革命の正当性を大衆の間で広めることを目的とした。プロレタリア芸術運動は、社会革命という中核的な政治目的のために、とくに大衆に親しみやすさをもつ絵画を視覚的なプロパガンダの手段として重要視した。芸術家たちは、絵画のイメージを利用して、政治問題を視覚的にわかりやすく伝え、一般大衆を啓蒙し、芸術運動に勧誘しようとした。機関誌の表紙を飾る絵画は、すべてではないにしても、機関誌に掲載された文章のイデオロギーや理論を図示して、機関誌の内容を凝縮した形で示したと考えられる。表紙を飾る絵画や、文章のなかに挿入されたイラストや漫画は、長い文章を読むことに慣れていない一般大衆の政治意識の変化を促す、容易であるが同時に強力な手段となった。読者たちは、これらの絵画、イラスト、漫画を、プロレタリア芸術を代表するものとして認識し、自分たちが芸術運動における主要な参加者との自覚を深めた。

この報告は、1931年から1933年までの間に刊行された『婦人戦旗』と『働く婦人』を取り上げ、これらの機関誌で女性がどのように描かれ、その描写がどのような意味をもったのかについて検討する。『婦人戦旗』は、日本無産者芸術連盟（ナップ）の機関誌である『戦旗』の

「婦人欄」が独立し、機関誌として発展した形で1931年の5月号臨時増刊として刊行された。『婦人戦旗』は、労働者階級の女性とプロレタリア芸術運動の女性活動家を対象とした最初の独立した機関誌であり、1931年12月までに4号が刊行された。ナップが改組されて結成された日本プロレタリア文化連盟（コップ）は、『婦人戦旗』を引き継ぎ、『働く婦人』として刊行した。1933年4月までに11号が刊行された。しかし、その後政府の弾圧により同年中に終刊を迎えた。

プロレタリア芸術は、階級社会を打倒して平等社会を実現することを目的とした社会主義思想に基づいた芸術のジャンルである。ジェンダーに関しては、プロレタリア芸術運動は明確に女性の解放と権利獲得を主張した。プロレタリアの女性を読者対象としたこれらの左翼機関誌の表紙に掲載され、文中に挿入された絵画やイメージから、社会主義者の芸術家たちが階級的、ジェンダー的抑圧を受けた女性労働者たちをどのように描写しようと考えたのかを窺うことができる。機関誌の視覚的イメージと文章（テキスト）を深く分析することで、当時のプロレタリア芸術運動で描かれた女性の特徴とジェンダーが社会問題としてどのように認識されたのかを明確にすることができる。プロレタリア芸術は、審美的、抽象的なものを否定する特徴をもっており、芸術が社会革命を大衆に明確に訴えるための媒体であると捉えていた。報告は、女性向け機関誌の視覚的な描写がプロレタリア芸術運動のフェミニズムと女性解放への見解とアプローチを示す格好の歴史的資料を提供することを示す。

（きむ・いじん 法政大学大原社会問題研究所元客員研究員、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）美術史学科博士候補生）

（翻訳：鈴木 玲）